

会長この一年

高エネルギー物理学研究所 岩崎 博

本学会が設立されて5年目のところで会長の大役を担うこととなった。1年目、2年目においては学会の基礎を固め、存在をアピールするための活動が行われていたが、5年目としては学会の一層の充実を目標に掲げ、運営を行った。私は学会の活動の2本柱として、年会などの学術的会合の開催と学会誌の発行を挙げたが、この1年を振り返るといづれもほぼ合格と自己採点できる内容であり、役目は果せたと思っている。

まず風薫る5月に仙台で年会を行った。広瀬川に臨む市民会館の快適な会場で多くの会員諸氏が顔を揃え、にぎやかな会合となった。近ごろはなにかと会合が多く、あれやこれやの催しに出かけるだけで1年が過ぎてしまうとこぼしている人をよく見かけるが、放射光学会はそのような問題点を乗り越えて多くの会員を引きつける魅力を持っている。特別講演やシンポジウムの面白さはさることながら、ポスターセッションをまわってみると、現在の流行ではないけれども着実に信頼性のある研究に出くわしたり、まだ山のものとも川のものとも分からないが何か素晴らしい発展に結びつきそうな予感がする研究に巡り会ったりする。ポスターの前で若い会員の熱弁を聴くのは少々骨が折れるけれども、聴いた後の余韻はなんとも云えず良いものである。この5月の年会において新しい共同研究の芽が生まれたり、人事交流の糸口ができたりに違いない。実行委員長を勤められ、会の成功をもたらされた佐藤繁氏をはじめ、地元の方々の努力に感謝申し上げたい。

なお年会に関連して次のような意見を聞いた。

放射光学会年会の他に各施設のユーザーミーティングがそれぞれ開かれているが、それらを同一時期に同じ場所で開き、時間と費用の節約をはかれないかというものである。例えば年会の会期を1日ぐらい延ばし、それをユーザーミーティングの日に当てることはできないだろうか。ユーザーミーティングでは各施設固有の問題を話し合い、特別講演やシンポジウム、そして研究発表は年会の場で共通に行う。このようなやり方には種々の問題があることは承知しているが、そこをなんとか工夫して、会員の出張回数をできるだけ減らし、研究に専念できる時間を増やすべきだと思う。

今年度の学術的会合のもう一つの目玉は放射光フォーラム「放射光が開くミクロの世界」であった。これは放射光科学・技術に関心を抱き、この分野に入ろうとする人を一人でも多く獲得する狙いを持っている。世の中は不況の風が吹き荒れていたが、それにもかかわらず多数の参加者を集めることができ、興味ある講演とそれに対する熱心な質問が続いた。そしてさらに大きな成果は、立派な「予稿集」ができたことであって、その内容は予稿の枠をはるかに越えた素晴らしい解説記事となっている。とくにドイツのMenz氏による章は圧巻で、わが国においては未開拓であるマイクロマシーニングについて丁寧に詳しく書かれている。フォーラムの終了後もこの「予稿集」は有用な文献として多くの会員に読まれることとなるであろう。これらからもこのようなフォーラムをどんどん開催すべきであると思う。この催しの成功

は行事委員長の尾嶋正治氏の献身的努力によるところが多いことを銘記しておきたい。

次に学会誌であるが、充実した内容を持っての定期刊行が実行された。例えば最新の2月号を見ていただきたい。これは「生物物理」と「XAFS」の特集となっており、ずっしりとした厚みの本となっている。この特集は昨年本学会が共催して開いた国際学会にちなむもので、これらの学会で話題となったトピックスについて11篇の解説、報告が載せてある。学会が終ってまだ半年にもならない中、つまりまだ熱の冷めない中に特集が現れたので、興味をもたれる読者はすぐにページを開いたに違いない。会員がいま何を望んでいるかを的確に察知し、それを直ちに記事にするというグッドタイミングの編集方針が我が学会の特徴である。編集委員会の大嶋委員長を始め委員の方々の活躍を大いに評価したい。

この1年の間に一つの国際的な動きがあった。それは学術誌 Journal of Synchrotron Radiation (仮

称)の刊行企画である。この動きは以前からあったようであるが、今年度になって急に具体化した。英国の Hasnain 氏と Helliwell 氏が企画の中心人物で、夏にわが国で開かれた国際学会の際に計画の提案を行った。本学会に対しても会長に計画の説明がなされ、計画に対する学会の意見を聞かせて欲しいとの要請があった。そこで評議員の方々に彼らから呈示された資料ならびに関連する資料を送って意見を求めるとともに、秋の評議員会で討議を行った。放射光に関する国際雑誌がないために放射光関連の学術論文がいろいろの雑誌に散らばって出ているのは不便であり、新雑誌の刊行は歓迎であるという意見が出る一方、放射光のような「手段」を共有する人の集まりである学会では雑誌は解説記事だけが載るもので、学術論文はそれぞれの専門誌に分かれるのが自然であり、計画のような雑誌は成り立たないなど様々な意見が出た。これらの意見を集約して両氏に伝えた。

一口メモ

ぎょ せい そう 魚 鯉 草

明の李時珍が著わした中国の医学の古典「本草綱目」の中にドクダミにつけた名前である。“鯉”とは生臭いという意味であり、ドクダミのあの独特の臭気を生魚の臭気と感じたと思われる。ドクダミは双子葉植物の離弁花で宿根草であり、世界には5種しかなく、そのうち日本には2種あり、日本中いたる所に自生している植物である。花びらと思われている白い花弁は総苞であり、この上の部分が裸花で、穂のように密生していて萼もなければ花弁もなく、花粉のできない雄蕊と、二つの柱頭と一本の雌蕊から成っている。

入梅時には茎の先から花が咲き、草の繁みから浮いて見える白い彩りは、ひときわ印象的である。因みに花ことばは“白い追憶”である。

